



▲昭和32年の旧国道28号線(八木)のマツ並木。当時は自転車が生計の足で、ハイヤーが通ることは珍しかったそうです(野水正朔さん撮影)



▲昭和50年代、八木鳥井



▲昭和30年代、並松の道には牛車も通っていました(野水正朔さん撮影)



▲マツ並木があった国道28号線(八木)には道路沿いに石碑が立てられています



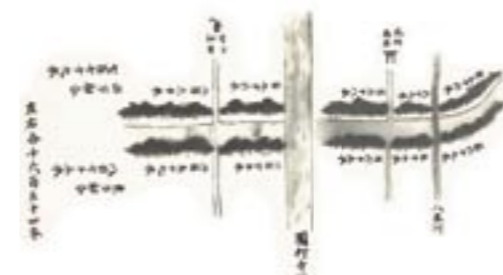
▲昭和50年代、八木大久保



▲昭和30年代、並松は巨木が多かったといひます(野水正朔さん撮影)



▲野水正朔さん(市) 並松の下は、いつもザァーと音がしていました。少し風が吹くと、松の葉が擦れるんです。夕方は民家のかまどや風呂から煙りが上がってね、松の幹にある穴からフクロウがホーホーと鳴く声も聞こえるんです。風情がありましたよ。



▲江戸時代後期のマツ並木(『淡路草』より)

# 天然記念物指定解除 淡路国道マツ並木

八木の並松と親しまれてきた「淡路国道マツ並木」が、消失から30年を経た今、国の天然記念物としての指定を解除されました。当時の記録や思い出を元に、人々の生活の中に存在したマツ並木を特集します。

ツタがはいのほり、濃緑のコケが寄り添った老松の雄大な姿には、遠い往時の面影がしのばれた……。かつて八木養宜上から神代地頭方までの国道28号線の道筋約5kmにわたり、1000本以上の黒松が林立していた「淡路国道マツ並木」。日本の代表的な景勝地として、大正15年2月24日には国指定天然記念物として指定を受けていました。このほど市内唯一の天然記念物指定から解除されることになりました。

淡路国道マツ並木は、詩情豊かな松並で、大木ぞろいで鬱蒼と茂った枝は、初夏には道行く旅人の通過に涼みを与えて、松の下で昼寝をする旅人も多かったとされています。

当時のマツ並木を記憶しているのは、現在の40代以上の人ではないでしょうか。ある人は学校の帰り道にペタペタと松の幹を触りながら下校し、ある人は洲本の市場まで荷車を引いた道だったなど、当たり前の風景だったといひます。そんなマツ並木も昭和55年に最後の一本が伐採され、今年で30年になります。

## マツ並木の起源は諸説あり

起源には諸説があります。

①養宜館の細川氏が延命寺(神代)に墓参りする沿道に松を植えた②豊臣秀吉の家臣が洲本城主であった時代、村の庄屋が罪あつて斬首にされかけたとき、「一夜のうちに、この街道の両側に松を植えれば罪を赦してやる」と



▲かつて並松が存在した場所にある公園では、老人会が清掃活動を行っているという柏木さん

いわれ、親戚や村の人たちと徹夜で松を植え、罪を赦された(首松伝説など、諸説が地誌に記されています)。

## マツ並木が消失した経緯

天然記念物指定当初、1065本の松が確認されていたマツ並木は、樹齢推定250年〜400年で樹高20m以上だったとされています。しかし、台風による被害や国道改修、松くい虫被害などで、天然記念物指定から55年後の昭和55年に最後の松の木が切り倒されました。



▲最後の巨木をバッサリ。クレーン車に吊るされた松(八木鳥井バス停前)

## 昭和35年〜45年

高度経済成長期のこの頃、淡路の交通網は一変します。35年からの国道28号線大改修、41年の電線線の廃止が行われ、マツ並木の保存・復元が困難な状況となりました。

特に国道の整備では、180本以上の松を犠牲にすることになります。当初、国から文化財保護を考慮に入れた国道改修計画が出されたものの、地元住民から強い反対があり、計画は変更。原案では、田畑を潰すことや国道沿いの商店の衰退を招くという理由から、



▲旧国道には大変立派な松が多くあったが、無くなるのはあつたという間だったという素川さん

## 松は失われたが、人々の心に

並松はふるさとの誇り。無くなつたのは惜しい気持ちもある。文化財保護審議委員の素川恒男さん

マツ並木を犠牲にしても「旧国道の拡幅」を行うという住民要望の多い路線に変更となりました。

## 昭和46年〜53年

台風や松くい虫などの被害で、46年10月には265本となります。また、八木から市円行寺橋付近までの約2kmの間ではマツ並木としての景観が保たれていたものの、市地区から神代地区にかけての約3kmの区間には、30本程度の松が疎らに残るのみとなりました。このため、翌47年には同区間の天然記念物指定が一部解除されることとなります。さらに、翌48年からは松くい虫の被害が拡大し、年間10数本〜50本以上の枯死木を伐採しなければならぬ状態になります。

## 昭和54年〜55年

54年12月には合計3本の松が残るのみとなり、翌55年には最後の一本が切り倒されました。

## 並松が懐かしい。並松は地域の象徴だった。

柏木一馬さん(八木)は、並松を小さい頃から見て育ちました。「子どもながらに並松の松の太さを比べようとしたことがあります。3mを超える幹を3人で手をつないでよく測つてみたものです。また、樹高30mを超える松もたくさんあつたことも覚えていひます。あるとき、空がバリバリと鳴つて、高い松の木に雷が落ちました。見に行つ

てみると、松の皮が上から下まで裂けて中がむき出てたんです。高かったあの松もいつの間にか枯れてましたよ。

台風の被害も多かったですね。強風で高い松が倒れたこともありました。道路も今と違って、松の根つがある両サイドが道路より高いんですね。そのため、倒れた木が反対側に掛かつて、倒木の下をくぐりぬけて通つた記憶もあります。もちろん、交通の妨げになつたので、後の処理が大変だったんでしょうけど……。

並松はもう無くなつてしまいました。が、地域の象徴でした。皆が知つていたものが無くなつたときは寂しくもありましたが、最近の交通事情への対応などで、あきらめるほか方法もなかつたんですよ。この地に立派な天然記念物があつたことを、忘れないようにしてもらいたいものです。」

## 「松はずれ」といわれる地名

当時、並松が途切れる神代の辺りを松がここまですることから「松はずれ」と呼んだそうです。並松は、人々の生活と密着し、不思議な糸で人と人とを繋いでいたのではないのでしょうか。